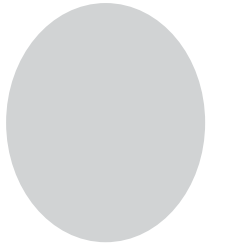


二人の人と出会って



上柴東小学校5年
羽鳥 花音

今までのわたしは、しょうがいのある人は、大変なんだろうなと思っていました。しかし、四年生になり、二人の人を知り、考え方が大きく変わりました。その人は、おとたけ洋太さんと塚本京子さんです。まず、おとたけさんは、道とくの『オートちゃんルール』の勉強で初めて知りました。いくら野球が好きだと言っても、「どうして、野球のバットを持って、みんなと遊べるのだろう。」とても不思議でした。なぜかというところ、おとたけさんには、両手両足がないからです。わたしは、できるはずがないと思います。

しかし、おとたけさんは、野球だけでなく、サッカーやドッジボールなども、みんなと同じように遊びました。クラスメートの一人として、けんかするのも遊ぶのも「あたりまえ」と受けとめて、思いっきり外で遊ぶことができたと言っています。わたしは、感動したのは、クラスの友達がいろいろな特別ルールを考えてくれたことでした。「何てやさしい友達なんだろう。とてもいい考えだな。」と思いました。そして、しょうがいのある人と同じように遊ぶことができ、やさしさを思いました。

次に、学校の人権こう演会で、車いすバスケットをしている塚本京子さんの話を聞きました。「できないことがたくさんあるんじゃないのかな。」と聞いていました。ごほんのじゅんびやそうじなどは、全然で

きないと思っていました。ところが、全部一人でやっていました。車の運転も自分でできたので、この日も遠くから来た一人で行って来たというのを知り、びっくりしてしまいました。おふろそうじもやっていて、塚本さんは、手伝わしてもらうとまげものになるというのです。とても強い心を持っているんだなと思いました。わたしの方が負けていると思います。

また、車いすバスケットの実演もしていただきました。何回もシュートを決め、さすがパラリンピックに出場しただけあるなあと思いました。そして、車いすの生活でも、努力さえすれば、みんなと同じようにできるんだとわかりました。

もっとおどろいたことは、塚本さんの二人のお父さんは、お母さんのことを何でもできる、できてあたりまえと思っているという話でした。自分でできることは、自分で全部しているのです。わたしは、自分でできることをもつとがんばらないといけないと思います。

わたしの知っている人に、体にしょうがいがあり、ねたきりの子がいます。声がよく出せない、ある時、リコーダーをふいてあげたら、体をばたつかせて喜んでいました。それを見て、わたしも本当にうれしくなりました。自分でなにかできるかなと考えてやったことがよかったんだと思いました。

わたしは、しょうがいのある人だけでなく、困っている人に出会ったら、今までは「だいじょうぶ。」と言っていました。これは、「わたしに何かできることはないですか。」と声をかけてあげたいです。相手の気持ちを考え、やさしさを言葉や態度で表せる人になりたいと思います。塚本さんやおとたけさんのしてきたように、みんなが楽しいと言えやさしい世界になっていくように、自信を持って生活していきたいです。

夢

なかるべからず

色えんぴつの重なりで

はらだ 原田シンジさん



凜とした存在感

色 えんぴつと鉛筆の大きな違いは、たくさんの色を奏でられることだ。赤や青、白まで扱うことができる。

そして、余り知られていないことだが、それらを重ね合わせ

ることで、更に色を作り上げることができている。

扱いは難しいが、その分、力強く、優しい色彩で凜とした存在感が生まれる。それを究極まで高めた画家がいる。

画家 原田シンジ

彼の世界に浸り、今日も世界のあちこちで感嘆が漏れる。

Book

ふかや必読書 30



『二十一世紀に生きる君たちへ』
しば りょうたろう 司馬 遼太郎

歴史小説家である司馬遼太郎さんから二十一世紀に生きる君たちに託された永遠の願いが力強い言葉で語られています。あなたも背筋を伸ばして生きていく勇気をもらえることでしょう。

感想 みんなの

岡部中学校2年 田端 一喜さん (現3年)

「私は歴史小説を書いてきた。」という言葉で始まるこの本。読み終えて、僕達には「未来」があること、人間は自然によって生かされているということ強く感じた。また、思いやりの心を持つことが大切で、どれだけ世界を変えられるかもわかった。僕達は、今後の日本を背負っていく立場であり、重要な役割を担っている。「二十一世紀に生きる」僕達に、人生について考えさせるすばらしい本であり、しかも写真入りで読みやすい本である。

Letter

ありがとうの手紙



最優秀賞
小学校高学年の部



ささえてくれた友達へ

大寄小学校5年 (現6年)

こじま はるか 小島 遥さん

林間学校の朝、本当はとても不安だったんだ。両足のイボのちりょうで、ふつうに歩けないから、みんなにめいわくをかけるのがいやだったんだ。

でも、みんなは、荷物を持ってくれたり、色々助けてくれたり、はげましてくれたりしてくれたね。ぼくはすごくうれしかったんだよ。とても楽しい林間学校になったんだよ。みんな本当に、「ありがとう。」

これから、みんなが何かこまっていたら、ぼくがみんなにお返しをするからね。ありがとうのリレーになるかもね。

寝食を忘れて

小さな頃から絵を描くのが当たり前だった。絵画コンクールなどで幾度となく入選を果たしたが、描く理由はただ、何かを表現したいだけだった。

深谷中学校へ入学した頃から一時、その表現方法は音楽に傾いていった。音楽も自分を写し出す鏡としては、絵と軌を一にするものと思っていた。

高校を卒業すると、本格的に音楽の道へ進んだ。著名な音楽プロデューサーの下、それなりに充実した環境で活動していた。しかし、そこでの発見は意外にも、内なる思いがどんどん

人と人を繋ぎ

現在 在毎年開く個展には、週に千人単位の来場者がある。しかし、海外ではメジャーな色えんぴつアートも日本では知名度が今一つだ。そこで、絵画スクールで講師を務め、本も4冊執筆し、日本での裾野を広げる活動をしている。

よく、個展の来場者から「色えんぴつなのに凄いな」と声をかけられる。その域から脱し、画材抜きで「凄いな」と言われた。

そうやって初めて次の扉が開かれる。そして、本当の色えんぴつアートが心の中で重なり、人々を繋いでいくと信じている。

夢七訓

夢なき者は理想なし
理想なき者は信念なし
信念なき者は計画なし
計画なき者は実行なし
実行なき者は成果なし
成果なき者は幸福なし
ゆえに 幸福を求める者は夢なかるべからず※



『Quilt with Peaches』
09年 CPSA 入選作品

絵画へ向かっていく自分だった。その頃から、表現したい空間、空気が次々と湧いて出た。寝食を忘れる日々が続いた。全てが独学だったため、自分の尺度を得るため描き溜めた作品で絵画展、個展を開いた。そ

(本文中の敬称は本人の承諾を得て省略しています)